

「革命」をめぐる連帯と対立：  
ロサンゼルスにおけるイラン出身者の政治参加に関する研究

基礎人間科学講座  
椿原敦子

1. 問題の所在

LA のイラン人社会では、イラン人同士が自分たちを差異化・細分化する語彙—経済階層、民族=宗教的帰属、政治的信条を表す言葉が発達し、その語彙のグリッドの中に（その時々に応じて）自分を位置づけることで生活世界を形成してきたことがこれまでの調査で明らかになった。今回はその中でも政治的立場からの細分化に着目して、過去と現在にどのようなカテゴリ（立場）が存在し、人々はその中でどう行動してきたかを明らかにするものである。

2. 調査概要

当初の予定：1980年代 LA におけるイラン出身者の政治参加状況をインタビューと当時の雑誌や新聞から考察

→現在進行中の運動に焦点を当てるべく調査内容を変更

\*2009年6月12日イラン大統領選挙実施。アフマディネジャード大統領選出。イラン国内外では不正を指摘し、選挙のやり直しを求める声が高まる。イランでは路上で抗議する市民と警察との衝突が激化し死傷者が出た。LAでも抗議活動が行われ、最も多い時で数千人規模のデモへと発展。

調査期間：2009年9月15日から10月11日

調査地：アメリカ、カリフォルニア州ロサンゼルス市

調査項目：

(1) 参与観察

- デモの取材
- インタビュー

(2) 文献資料収集

- ペルシア語および英語の定期刊行物の収集

3. 1980年代における政治的対立の構図

\*友人同士、夫婦で政治的立場が異なることは稀ではなく、それが人間関係を分断することはなかった。政治的立場の相違が先鋭化するのとは敵対するメディア同士の中傷合戦か、デモのような見知らぬ者同士が出会う時

4. 選挙後の LA におけるデモ行動の類型化

(1) 緑の運動：

- ・現在イラン国内で行われている抗議活動の総称
- ・現体制の枠内での公正や人権の要求

・LAでは、留学生など新参加者が中心。緑の服やリストバンドなど

(2)「民主化」運動：

- ・複数の組織。イラン国内外の人権活動家やジャーナリストが中心の、世界的な連携
- ・イランの民主化、人権の要求
- ・体制の存続は問題としない。旗を掲げるなら、緑白赤でシンボルなしの三色旗やイランの地図など

(3)「亡命者」の運動

- ・複数の組織。細分化。(2)より結成時期が古い傾向
- ・体制転覆を目標とする
- ・革命以前のイラン国旗を掲げる

\* (2)(3)はペルシア語での通称はなく、発表者による分類。実際の組織は上記の類型にまたがる要素を持つ

5. デモの場における実践と語り

(1)スタンダードの形成

(2)質問「イランの国民がイスラーム共和国を支持しているとしたら？」

(3)語り得ないものを声にする

幼少期の戦争体験／民兵による嫌がらせ、逮捕／親の革命前後の経験・・・

→個人的な体験から、イランの民主化、人権擁護、体制転覆の運動へ

(4)不可視の抑圧を可視化するもの

6. 考察：ロサンゼルスでイランの政治に関ること

(80年代との比較)

(1)「亡命者」の運動のスタンダード化

(2)かつて対立していた派閥同士の歩み寄り

(3)古参加者と新参加者の間の不和

LAの人々は、イランから出ることによって言論や行動の自由を獲得したわけではない。イランの政治に関わる人々は、デモや集会などで不特定多数の人の前に晒すとき、制約や恐怖を感じ、この内面化された不自由さが「イランの人々の自由」を希求する原動力になると考えられる。